

目指す学校像

高き志【こころざし】

地域とともにある

勢いのある学校

No. 31 (R4. 1. 11発行) 文責 校長 福田雅也

「利他学」

「新年 あけましておめでとうございます。
今年も昨年同様、どうぞよろしく願いいたします。」

今年のお正月は、感染が少し落ち着いた状況で迎えることができ、昨年とはまた違ったお正月になったのではないのでしょうか。我が家も、昨年は集まれなかった親戚一同が実家に集まり、とてもぎやかでした。孫やひ孫に囲まれた私の両親はとても嬉しそうで、みんな集まって本当に良かったなと思いました。きっと、保護者の方々のご家庭も、例年に近いお正月だったのではないかと思います。ご家族で楽しいお正月を過ごされたことをお慶び申し上げます。

とは言え、新しい変異株の流行が急増し、まだまったく安心はできません。3学期は、学校での感染予防策に、気を引き締めて取り組んでいかなければならないと感じているところです。

話はまったく変わりますが、標題である「利他学」…こんな名前のある学問があるのをご存知でしょうか。私は、この冬休み中に見たあるテレビ番組の中でこの学問を知りました。第二の人生をこれからのように生きていくかを考えている時期だったので、その内容にとっても興味が湧いたのです。

「利他」…対極にある言葉は当然「利己」です。そこから考えると、「利他」という言葉は自分を犠牲にして他人のために行動することになるでしょう。しかし、そこは学問ですから「利他学」となると、そんなに単純なことではなくなってくるようです。私は、その部分にとっても興味が湧いたのです。その番組では、「利他学」を研究されている東京工業大学の伊藤亜紗教授（科学技術創成研究院未来の人類研究センター長）という人が対談をされていました。その中で次のような話をされていました。「科学技術は基本的に人のためや地球のためだったり、何かのために常にある。つまり利他的な意識で研究者は開発しているのだけど、でも本当に科学技術が結果として人間のためになっているかなと考えたときに100%イエスと言えない状況に今はある。そもそも「何かのため」ということが実は言うほど簡単じゃないんじゃないかという思いがある。」

その後、休み中に伊藤教授の著書も読みました。本の中には、対談では分からなかった、さらに興味深いことが書かれていました。特に共感できたのは、フランスの経済学者ジャック・アタリという人の「利他主義」の考え方です。彼は、今、世界が直面しているようなパンデミックを以前から予想し、次のような話をしていたそうです。「利他主義とは、合理的な利己主義に他なりません。自らが感染の脅威にさらされないためには、他人の感染を確実に防ぐ必要があります。また他の国が感染していないことも自国の利益になります。利他的であることは、ひいては自分の利益になるのです。」

対談を聞いた時点で「利他学」は、「もしかすると『情けは人のためならず』…このことわざにつながるのではないかと感じていた私にとって、「やっぱりそうか」と思える内容でした。このことわざは、著書の中で実際に取り上げられており、「利他主義は利己主義にとって合理的な戦略であり、利他主義は利己主義の対義語であるという伝統的な考え方を意図的に転倒させたものです。」と書かれていました。となると、「利他」はそんなに難しいことではなさそうです。「利他」を前面に押し出し、自己犠牲を伴いながらやっていくのではなく、その気持ちはしっかりと持ちつつ、先々は「利己」につながる。あるいは、少しは「利己」の気持ちを持つ。このくらいでいいのかな、と思うことができる内容でした。

こんなことを考えた年末年始でしたが、目の前には高木小の子どもたちがいます。今年度残された三カ月は、前回の学校便りでお知らせしました、「感謝の気持ち」をキーワードに取り組んでいきたいと考えています。私からの宿題は127名中、103名がしっかりとやってくれていました。これを一つのきっかけにして、「ありがとう」の言葉が学校や家庭で少しでも広がってくれればと願っています。